

【研究報告】

『Diamantes y pedernales』の 小説世界に関する一考察

伊藤 幸子（ジャパンエコー社）

現代ペルーを代表する小説家、民族学者であるホセ・マリア・アルゲダス（1911-1969）は、ペルー山岳地帯を舞台に、「内側の視点」からアンデスの現実を描いたことによって高く評価され、ラテンアメリカ文学史の中では、インディオの擁護と復権の運動と定義される、インディヘニスト小説家のひとりとして位置づけられている人物である。

アルゲダス自身とその文学作品、人類学的研究に対する関心は、死後25年を経た今日でも衰えることなく、ことに小説については文学の研究対象としてのみならず、人類学、社会思想、神学などによる様々な角度からの研究成果が現在も発表されている。幅広いアルゲダス研究は、単なる文学研究ではなく、彼や彼の作品を通して、現実のアンデス世界を知ろうとする試みの一つと受け取ることもできる。

本稿では、1954年に書かれた中編小説『Diamantes y pedernales』（ダイヤモンドと火打ち石）を取り上げて考察をすすめたい。

アルゲダスの文学作品は、全集が全5巻であることから判断できるように、多いとは言えない。その中で文芸評論の対象となる機会がもっとも多いのは長編小説の『Los ríos profundos』（深い河）（1958）と『Todas las sangres』（すべての血）（1964）の二作である。また彼の死後出版された『El zorro de arriba y el zorro de abajo』（上のキツネと下のキツネ）（1971）も、アルゲダスの思想を解くカギが隠された作品として注目を集めている。

しかしながら、本稿で扱う『Diamantes y pedernales』はほとんど研究の対象となっていない。まとまった論考としてはコルネホ・ボラールによる「ダイヤモンドと火打ち石 インディオ音楽の賛歌」が挙げられるが、この中でボラールはこの作品を他のアルゲダス作品、初期の代表作『Agua』（水）（1935）や『Yawar Fiesta』（血の祭）（1941）と比較して、『Diamantes y pedernales』の作品世界は「固定し歴史の中に位置していないような世界」を提示していると指摘する。言い換えれば、現実との関連の薄い、虚構性の強い作品ということであり、この指摘により、前述したアルゲダスへの興味が、現実のアンデスへの興味に重なりあうことが明らかになる。従って、そうした興味を持つ論者たちにとって、一見すると「現実のアンデス」を描いていないと思われる『Diamantes y pedernales』はさして価値のない作品であり、評論の対象となることもなかったのだと言えよう。

コルネホ・ボラールは『Diamantes y pedernales』の虚構性を指摘する一方で、この作品に描か

れる人物の行動と話のつながりはある深い象徴的秩序に基づくものであり、アンデスのインディオ文化を象徴するものとして描かれる音楽を取り上げながら、アルゲダスがインディオ文化をミスティとインディオという二つのグループの合流点と考えていたのではないかと結論している。

この作品は1941年の『Yawar Fiesta』上梓後、精神を病み、後に『El zorro de arriba y el zorro de abajo』の中で「書くということがまったく出来ずにいた」と表現された時代を経て発表された作品でもあることから、アルゲダスの転換点に当たる作品であるとも考えることができる。本稿ではコルネホ・ボラルの指摘をふまえ、アルゲダスの作品を通してアンデス世界にせまろうと試みる前に、彼の作品世界そのものについての分析を行ってみたい。その第一歩として『Diamantes y pedernales』の小説世界の特性についての考察を行おう。

まず『Diamantes y pedernales』のあらすじを簡単に紹介しておく。アンデス山岳地帯の果樹栽培で生計を立てる小さな村に生まれたインディオのマリアーノは、祖父、父親とハーブ弾きであったため、彼自身も幼い頃からハーブに親しみ、その名手となった。しかし精神薄弱であったため、家族から厄介者扱いされ、生まれ故郷の村を追われるように出た。彼は、「インテリヘンテ・ホベン（賢い若者の意）」という名のチョウゲンボウとハーブを携え、故郷よりもずっと大きなランブラの町へたどり着く。そこでマリアーノは地方一の有力者である大地主ドン・アバリシオに拾われる。ドン・アバリシオはマリアーノの奏でるハーブの音に魅せられて、彼を雇い、自分だけのためにハーブを弾かせる。しかし、使用人に過ぎないマリアーノを「ドン」という敬称付けで呼び、村人に不思議がられる。それから三年の月日が流れたある日、イタリア人の音楽教師の未亡人とその娘が町にやってくる。ドン・アバリシオはその娘アデライダの美しさの虜になり、滑稽とも見える求愛を繰り返すようになる。そんなドン・アバリシオの様子を見て一人の女が悲しみにくれていた。彼女はイルマという名で、オコパンバというアンデス山中の小さな村出身の貧しい地主の娘であった。彼女は美しい歌声の持ち主で、たまたまその村を訪れたドン・アバリシオに、歌を歌っているところを見初められ、略奪同然に連れてこられ、今はドン・アバリシオの愛人の一人となって孤独な日々を過ごしているのだった。このままではドン・アバリシオはアデライダと結婚して、自分は捨てられてしまうと思い詰めたイルマは、マリアーノを使ってドン・アバリシオの心を自分に向けようと試みる。イルマとマリアーノはそれぞれの持つ音楽で心を通わせ合うのだが、イルマの計画は裏目に出てしまう。それはマリアーノがドン・アバリシオとの約束、自分以外の人間の前でハーブを弾かない、を破ってしまう結果となってしまったからである。イルマの家を訪れ、そこでマリアーノのハーブを耳にしたドン・アバリシオは激怒し、ハーブを壊してしまう。必死に主人に許しを乞うマリアーノはドン・アバリシオの自宅の二階から彼に投げ落とされて死んでしまう。ドン・アバリシオは村役に村の伝統的な方式にのっとってマリアーノの葬式を執り行うように命じる。マリアーノがドン・アバリシオ自慢の愛馬ハルコンに蹴り殺されたことにするのだ。マリアーノの死を機に、ドン・アバリシオはアデライダに別れを告げ、イルマを「一生苛むため」に彼女との結婚を決意する。

この小説は「作者が語る物語状況」で描かれ、特定の作中人物が語るという手法を取っていない。

主要な登場人物は山深い村出身のインディオのハーブ弾きのマリアーノ、強大な権力を持ち人々から恐れられる粗暴な農場主ドン・アバリシオ、山岳地帯奥地の村出身の貧しい農園主の娘イルマ、そしてイタリア人の音楽家の娘アデライダの四人であり、ドン・アバリシオとほかの三人の関係が中心となって描かれている。コルネホ・ボラールは、あらすじを紹介しながら「ここで描かれているものは、出来事としては単純で残酷なものでしかない」と評している。では次に、主要人物間の関係とマリアーノの音楽についての描写に考察を進めよう。

マリアーノは、ドン・アバリシオの使用人として彼の家にひとつの部屋を与えられ、賃金をもらっている。しかしドン・アバリシオはマリアーノを「ドン・マリアーノ」と呼び、大切に扱っている。マリアーノは出身地の村ではその腕を、「一日中鳩と一緒に過ごしているから、あんなに甘やかな音色が生まれるのだ」と讃えられるハーブの名手である。ドン・アバリシオを魅了したのもハーブの音色であり、アバリシオはその音楽を独り占めにすべく、「マリアーノを連れ出して、ハーブを弾かせた奴は蹴り殺す」と公言し、村人を震え上がらせる。直接マリアーノのハーブの音を聴けない村人はドン・アバリシオの家の中から聞こえてくる音色を耳にし、「天使が弾いているのか」と驚きの声を上げる。マリアーノは粗暴な農場主に命じられるままにハーブを弾く。ドン・アバリシオはその音色に聴き入り、自分の心を慰められるのはマリアーノのハーブだけだ、とつぶやく。

イルマは、「村の中で一番きれいと言うわけではないけれど、祭には欠かせない存在」と評されているように、美しい歌声を持ち、それを気に入ったドン・アバリシオによって生まれ故郷から遠くの町に連れて来られ、小さな家を与えられ、そこで時折の主人の訪れを待って暮らしている。イルマは町の誰とも親しまず、かといって、他の愛人とはちがいの主人の不在時に別の男達と過ごすこともない。ただひとり、故郷の村の音楽を思いだし、ギターを弾いたり歌を歌ったりして、悲しみを紛らせている。

アデライダは、「教会のマリア様」にたとえられる容貌を持った美しい娘で、その美貌の虜になったドン・アバリシオから、村で一番新しい家一軒と二人の使用人を贈られている。アデライダはその母親が説明しているように「イタリア人で国立学校の音楽教師」の娘であり、その話し方から「海岸地方の中流階級」出身とされているが、父親は既に死亡し、裕福とは言えない状況にある。村人は海岸部から突然やってきたこの二人の白人女性を好奇の眼差しで見つめるが、実際彼女たちは山岳地帯の町には不釣り合いな客人なのである。

精神薄弱のインディオのハーブ弾き、貧しい地主の娘、イタリア人の音楽教師の娘と立場はまったく違うが、三人は共にドン・アバリシオの住む「大きくて寒々とした」町にやってきたよそ者であり、経済的には非力で、農園主の庇護を受けなければその町では生きていけない人々である。ドン・アバリシオはそれぞれに魅かれるものがあり、彼女らを独占すべく庇護を与えている。この点において、マリアーノのハーブの音色もイルマの歌声や処女性も、またアデライダの美貌も同等のものとして描かれている。イルマがドン・アバリシオに略奪同然に連れ去られたことを、「よくある出来事」と表現しているように、使用人や女性を意のままにすることなど、山岳地帯の町では怖

いものなしの強大な権力者にとっては当たり前の出来事とされている。

しかしマリアーノのハーブの音については、イルマの歌声、アデライダの容姿のように、ただ単に抽象的な美として描かれるだけではない。マリアーノを疎んじて生まれ故郷を追った兄は、弟の腕を「お前だったら大きな町に行けば、祭の度に庭畑二つ分の収穫以上稼げるだろう」と評し、「村の偉いやつもお前にハーブを弾いてくれるように頼んで、友達のように扱ってくれる」と言う。普通ならば同等に扱われることもなく、「動作もきびきびしたところに欠け、手際よく判断しなければならぬ仕事は任せられない」マリアーノは、ハーブの腕だけで十分な収入と地位を得ることが出来る、とされている。そして町に下りたマリアーノは兄の言葉通り、その町の有力者の庇護を受け、「ドン」の敬称をつけて呼ばれるのである。よそ者のインディオであるマリアーノに対して「どのメスティソも町の有力者も村のインディオにするように、通りで殴りかかったり大声で怒鳴りつけたりすることは決してなかった」のは、ひとえにドン・アパリシオの庇護の下にあったからである。

「ダイヤモンドと火打ち石」というタイトルは、孤独なイルマが故郷のギターの旋律を思い出しながら歌う場面で用いられる、アンデスの山の比喩表現である。「アブリマクは、もっとも深く音楽的な川の流れるところである。それはずっと昔からの、強く、鋼の流れを持つ川である。川はダイヤモンドと火打ち石のように、アンデス山脈の高く硬いところをもうがち、深みをつくる。急な斜面の森の中を流れる川のほとりから、銀色に流れる川面を見つめていると、その深みに人は震え、目が眩むのを感じる。」アンデスの山中を流れるいくつもの川が硬い山々をうがち流れ続けていくというこの描写は、美しさよりもむしろ力強さを表現している。

イルマ同様、マリアーノの奏でる音楽の源もまた故郷に求められる。彼の生まれ故郷は次のように描写される。そこは山奥の果物の栽培だけで生計を立てる貧しい村だが、当局者は遠くにいて、村人は昔ながらの習慣を守ったまま暮らしを送っている。その地には本来の意味でがつつした残酷な地主はいなかった。突発的な事件も何も起きることなく、生活がゆっくりと静かに流れていくのだった。マリアーノはそこで「川に守られて」育った。

マリアーノは村の風景を思い出しながらハーブを奏でる。その指先から生まれる音楽は登場するすべての人物の心をうつものとされている。もちろん、ドン・アパリシオに独占されることがなかったように、マリアーノ自身も絶対的な音楽の所有者として描かれているわけではない。マリアーノは怒り狂う主人に楽器を壊されたうえ、許しを求めても相手にされずに、命まで奪われてしまう、弱々しい存在である。

しかし、マリアーノの奏でる音楽は、ただ純粋で美しく鑑賞され、所有されるものではなく、作品中の比喩を用いれば、硬い山をもうがち、恒久の中を流れていく川の強さを秘めているのである。

『Diamantes y pedernales』の中でアンデスの音楽は、人々を魅了する美であると同時に、無力なマリアーノに生きていく糧と尊厳を与える、力として描かれているのである。

[文 献]

- Arguedas, José María., *Diamantes y pedernales*, Lima, Editorial Horizonte, 1986.
- Cornejo Polar, Antonio., "Diamantes y pedernales. Elogio de la música india", *Revista de Literatura Hispanoamericana de la Universidad de Zulia*, no. 12, enero-julio, 1977, pp.11-19.